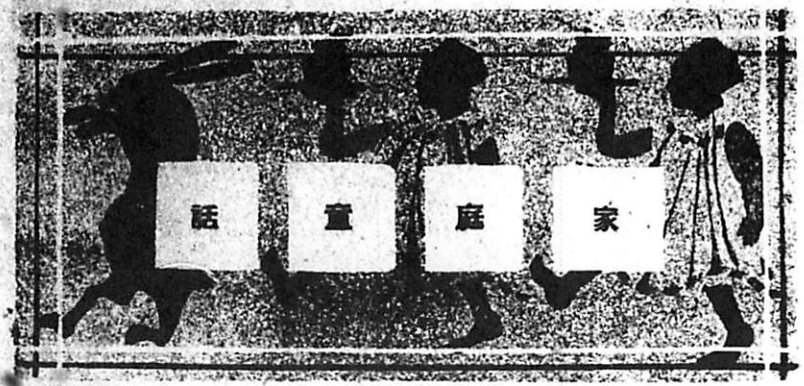


三つのお話

永代美知代

祖母様の目覺時計

二郎さんは不平でした。だつて二郎さんは今日の三時に東京驛迄出掛けなければなりません。祖母様は先刻母様をお出迎へに遣れて行くつて、あんなに堅いお約束をなすつて置いて、最う皆な忘れてお了ひなのか知らと二郎さんは不平でした。それに祖母様は午睡をなさると、夕方暗くなつて後迄寢込むのが癖ですもの。

『なにね、ほんの一寸と、十五分間ほつちりだけさ、長寢はしません。』

祖母様が仰有ると、二郎さんは大きな眼を丸く見張つて云ひました。

『え？　十五分間ほつちり、祖母様、後其間に牡鶏に餌をやつて來ます、それからお汽車の玩具で遊びます、温順しくすれば裏の緣側で遊んだつて可いでせう。』

『なにね、温順しくしなくても可いの、祖母様寢過ぎると大變だからね。』

二郎さんが茶の間を出て行くと、祖母様は今一度掛時計をお見上げなさいました。そしてお首を振つて、獨語を仰有いました。

『何だか寢過ぎさうだよ。』

二郎さんのお家は東京から少し離れた田舍にありました。晝間の間は老婆も女中も皆な野良仕事に出掛けて留守でした。お家の中はひつそりと靜まりかへつて、チツク、タツク掛時計の音だけが際立つて聞えました。

『二時半には此家を出て行かなければならない、支度に十五分かゝるとして、あと十五分が假寢の時間か。』

祖母様はほんの一寸との間寢る事を假寢と仰有るのでした。

籐椅子を持ち出して、揺椅をよくしながら、祖母様は又しても獨語を仰有いました。

『眼覺時計無しに起きられるかしらねえ。』

でも祖母様はお眼をお閉ぢになりました。そして直ぐお寢みなさいました。大きな掛時計は相變らずチツク、タツク、チツク、タツク時を刻んで行きました。

一分、二分、それから五分たちました。十分、十一分、十二分——丁度其時祖母様は御自分で眼が覺めた夢を御覽になりました。

十三分たつた時には、二郎さんのお顏を洗つてやつて、御自分の頭髮を結つてる夢でした。

十三分と十七秒過ぎた時、祖母様の夢は、二郎さんとこんな話をしてゐる處でした。

『母様は屹度びつくりしてお喜びなさるよ。』

十四分目の夢はもう、二郎さんと一緒に東京行きのお汽車に乘つて居りました。ガタンポツポ、ガタンポツポ、汽車道の美しい景色を見ながら、好い氣持に走ります。ガタンポツポ、ガタンポツポ——實際祖母様はぐつすり寢込んでしまつて、大丈夫晩の五時まで眼の覺めつこはなささうでした。

二郎さんから貰つた中食の御馳走を食べてしまつた牡鶏は、砂風呂を浴びてすつかり羽毛を綺麗にしますと、好い氣持になつて其處いらを散歩し始めました。緣側の上へ飛びつて二郎さんの傍へ行つても、二郎さんは生憎汽車遊びで夢中です。牡鶏は仕方なしに役お家の中へ散歩を續けて行きました。

茶の間の前迄來ると、牡鶏は口ばしで以て入口の戸をコツコツと叩きました。そして首を横に傾けたまゝ、靜かに立ちました。

『お入なさいまし。』

牡鶏は多分誰かゞ斯樣云つて呉れるものと思つたのでせう。靜かに案内を待つてゐましたが、何時迄待つても何の返事もありません。牡鶏は思ひ切つて茶の間の中へ入つて行きました。長椅子の上の祖母様を見ると、大きな聲で御挨拶を申上げました。

『コツ、コツ、コツケラコウ！』

でも祖母様は今、お汽車に乘つた眞最中ですもの、牡鶏の鳴聲を汽笛の響と間違つて聞きました。併し其處はまだ祖母様のお下りになる停車場ではありませんから、祖母様はやつぱり、ガタンポツポとお乘りなさいます。

『コツ、コツ、コツケラコウ！』

今一度大きな鼾が鳴つたと思つて、祖母様は周章てゝお眼を開きました。

「さあ下りませうよ二郎さん。」

祖母様は吃驚して、眼の前の牡鷄を見据えて被在いましたが、やつとの事で、今のは夢だつたと氣がつくと、大急ぎで掛時計をお見上げになりました。

掛時計は丁度二時十五分過ぎでした。

「まあよかつた事！」

祖母様は嬉しさうに仰有いました。

「さあ牡鷄さんや、お前はお庭へおいでなさい、御褒美にお麥をどつさり御馳走してあげませうね、さあさあ牡鷄さん。」

それから二郎さんは祖母様に連れられて、約束通り東京駅へ行きました。そして母親の顏を見ると直ぐ、二郎さんはお話しました。

「ねえ母様、後等はね、牡鷄のお蔭で今日お出迎へが出來たんですよ。」

小猫の當惑

信子さんと邦子さんと、二人が飼り小猫の名前で喧嘩するものですから、祖母様はわざわざ田舍から猫なんぞ連れて來るんぢやなかつたと、こほしてゐらつしやいます。

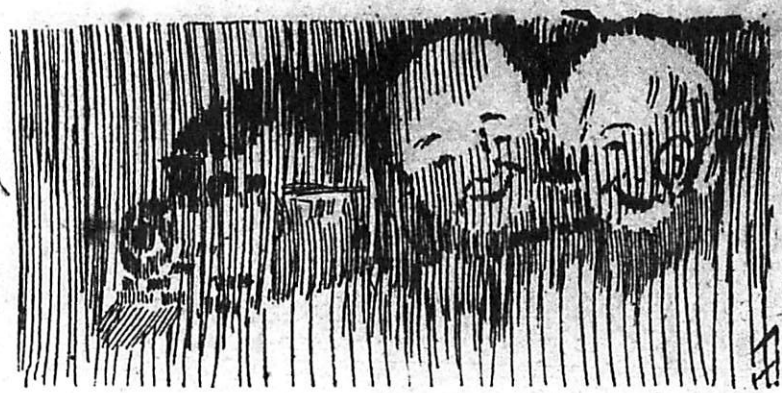
信子さんは小猫の名前を「小夜」とつけ度いのでした。何故と云ふに、小猫は眞黑な毛色でしたから、そして眞黑なものですから、邦子さんは「黑」とつけ度いのでした。それは兎に角、小猫の毛色が眞黑なのには、二人共文句ありませんでした。

信子さんは「小夜」はお勝手で寢かせて、ほんの牛乳だけで育てなければいけないと云ひ張りました。すると邦子さんはまた、何でも彼でも喰べさせたがつて、終にはお蜜柑のやうなものまでやりました。そして夜は木小舍に寢かせるのが一番だと云ひました。

「そんなに喧嘩ばかりなさるなら、小猫なんぞ、もう祖母様の田舍の、母様猫の處へ歸してしまひませう。」

母様は斯樣云つて御心配なさいました。

こんな風ですから小猫はまだ、「小夜」だか「黑」だか、自分の本當の名前さへ解りません



何よりも牛乳が一番好きだと思ふ事もありますし、かと思ふとまた、ビフテキが一等御馳走のやうにも思はれますものね。實際どうして可いか途方に暮れてしまひます。

成日の事、たうとう大變な事が出來湧きました。

「解らない人ね「小夜」ですつてばさ！」

信子さんが大きな聲で云ひました。

「お氣の毒樣、私の方では「黑」ですよ。」

邦子さんも負けずに云ひました。

こんな事位、小猫は前にも度々聞かされました。けれ共信子さんがヒーと擊めつ面を突き出して、邦子さんが同じやうに仕返すのを見ますと、いきなり何處かへ逃げ出して行きました。

一日經ちました。二日も過ぎました。けれ共小猫は歸つて參りません。

信子さんは新らしい牛乳注器を持つて待ちました。邦子さんはお祭りのやうな御馳走を作つて待ちました。

「どうかしたんぢやないかしら？私もう歸つて來てさへ呉れゝば名前なんぞどうでも可い「黑」や「黑」やつて呼んでやるけれど。」

たうとう信子さんが云ひ出しました。

「アラ可いのよ、歸つてさへ呉れゝば私だつて「小夜」やつて呼んでやることよ、だけども私心配だわ、若しかして犬にでも噛み殺されやしないでせうか。」

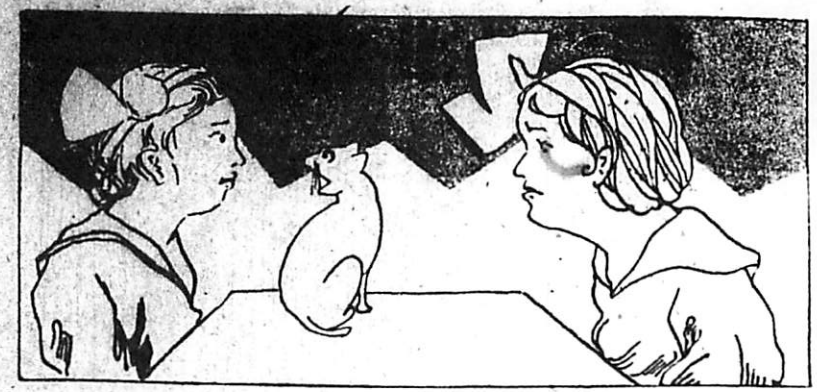
「自動車にひかれたかも知れないわね。」

信子さんが悲しげに云ひますと、邦子さんは泣き出しました。

「皆な風邪のせゐなのよ、あの時早く喧嘩をよして猫や、猫や、歸つておいでつて呼んでやつたら、あんなに逃げ出してなんぞ行かなかつたのよ。」

「いゝえ、それよりか私が早く「黑」やつて呼んでやればよかつたのよ、御免なさい、私が飼り勝手ばつかり云つたものだから、いけなかつたの。」

「否、私こそ早く「小夜」やつて云へばよかつたのよ、小猫は全く私共の喧嘩が怖かつたのね、二人が仲よくして呼んだら、屹度大喜びでニヤー、ニヤー甘つたれたに違ひないわね。」



「さうよ本當に、私達は何だつてあんなに喧嘩ばかりしたんでせう。」

「その癖二人でこんなにも可愛がつてゐるのにねえ。」

「ね、ちよいと家のあの猫つたら、それほよくお顔を洗つたことよ。」

「そして澄して、何か知ら考へ込んでさ、私あの縁側で以て日和ぼつこしてる姿態つたら可愛くつて、可愛くつて仕方がないわ。」

「私がね、お喉の處をそつと撫いてやるとさもさも嬉しくつて堪らなささうにゴロゴロ聲を立てゝ笑つたわよ。」

「何て可愛い猫でせう！だけども最う居ないのよ。」

「何處へ行つたんでせうね。」

「もう歸つて來ないでせうか。」

「歸つてさへ呉れゝば私達、まあどんなに嬉しいでせう。」

「二度と再び喧嘩なんぞしないわねえ。」

「えゝよ、こんなに一人が一緒に可愛がつてゐるんですものね、歸つてさへ呉れゝば可いわよ。」

二人はこんな事も云ひました。

月の好い或る夜の事でした。信子さんと邦子さんとが仲よくお肩にお手を掛け合つて、お玄關の式臺に並んで腰掛けて居りますと、誰かしらお庭の花壇の方から來るやうな足音が聞えます。見ると眞黒な小猫が後から、また一匹同じやうな黒い小猫がついて來る！

「オヤ「小夜」やだよ。」

「オヤ「黒」やのやうだ。」

信子さんも邦子さんも吃驚して見ながら、心の中で云ひました。實際「小夜」やとそして「黒」やが歸つて來たのです。

信子さんと邦子さんはやつとの事で解りました。それは祖母様の田舍から、小猫は自分そつくりの、祖母様でさへ却々お見分けがつかない程よく似た、双生兒の兄弟をつれて來たのでした。

どれが本當の家の猫だか解りませんでしたが、其内一匹の方の黒猫が、呆氣にとられた二人の傍へ寄つて來て、ちよいと目くばせしましたが、直ぐ仲間と一緒になつてちやれつきました。そしてそれつきり又、信子さんにも、邦子さんにも、どれがどれだか解らなくなつてしまひました。

全くこんなにも仲の好い、信子さんと邦子さんと此二人の樣子を見ては、小猫も最う安心です。愉快に樂しく遊んだり、甘えたりして、當惑するやうな事はありますまい。

豚男さんの決心

不思議な事に、豚そつくりの子供がありました。

父樣も母樣も甚く恥かしつて、他所の家へいらつしつても、その[illegible]のお話は些少もなさりたくないやうでした。

と云つて其兒は見た處、ちつとだつて豚のやうには見えませんでした。だつて母樣は何時もよく氣をおつけになつて、お顔もお手々も綺麗に洗つておやりになるし、着物だつて始終清潔にしてお置きなさいますから。

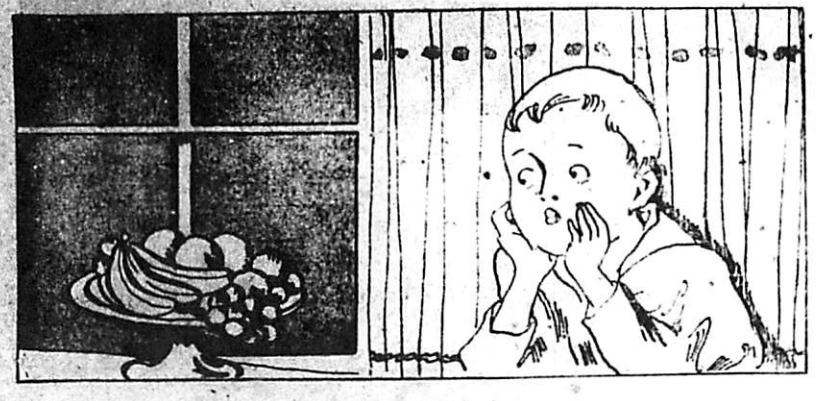
夜になつて寢てゐる處を見ると、誰だつてその兒を豚のやうだなんて思ふものはありません。母樣は時々無邪氣な寢顔を見ながら、お泣きなさいます。

「どうして此兒はあんなにお行儀が惡いのだらう？」

實際その兒は豚そつくりでした。何でも彼でも一番大きいのが好きで——蜜柑でも何でも、一番大きくておいしさうなのを摑つて横つて撰り抜きます。お饅頭だと二度も三度も持ちかへて、一番重さうなのを取らなければ承知が出來ません。全くの處よくもまあ、豚に似て居ますこと！

すつと少い頃には、思ふやうにならないとワアワア泣き通して、むつかり抜いたものですが、三つ四つになると父樣はその惡い癖をなほすやうにお叱りなさいました。ですけれども豚男さんの癖は、却々どうしてやまりません。

豚男さんが八つになつた時でした。用舍の叔母樣の處にお目出度がありまして、叔母樣は方々の親類をお招びになりました。豚男さ



んは叔母様のお家に着いた其晩、豚男さんは、最叔母様のお家内狀を見て非常に喜びました——叔母様はバイカラだから屹度西洋料理をどつさり御馳走して下さるに相違ない——

豚男さんは行き度くつて堪りません。

「母様、早く叔母様のお家へ行きませうよ」

豚男さんが云ひますと、母様はお茶をお振りなさるのでした。

「いゝえ、家ではね、誰も行かない事にきめましたの。」

豚男さんはがつかりしちまひました。

「何故ですか。」

斯う云つて聞いて見るまでもありません。

豚男さんは母様の蒼白めたお顏色で以て、何故およしになるのか、其理由が解つてゐましたから心配しました。

「母様、後生です、僕を信じて下さい、僕決してお行儀の悪い眞似はしませんから、ね、母様、後生です、僕をつれてつて下さい、ねえ母様！」

豚男さんは一生懸命お願ひしました、そしてたうとう連れて行つて頂く事になりました

叔母様のお家に着いた其晩、豚男さんは最う直ぐ變になりさうでした。

晩の御飯が濟みかゝると、叔母様はお女中を呼んで、紅茶と西洋菓子を持つて來るやうに仰有いました。

お女中は直ぐ、立派な大きなお鉢に盛つたお菓子を運んで來ました。そして豚男さんの丁度眞前の處へ置いて行きました。

赤だの白だの、種んな色で裝飾をつけて、如何にもおいしさうな、立派な西洋菓子です

豚男さんはそれが氣になつて堪りません。

「何と云ふおいしさうなお菓子だらう、どれが一番大きいかしら？」

見ないやうな風にして、そつと横目でにらんでは考へ考へして居りました。

「フ、丁度好い、一番此方にあるのが一番大きいよ。」

豚男さんは心の中で喜びました。だつて食後のお菓子は一番手近の人から取るものだと母様から聽かされてゐましたから、それがおまけに一番最初の切が一番大きいらしいんで

すものね。

「だけども僕が初めに頂くのでなくては、あの大きい切は當らない。」

一人で氣を揉んでゐましたが、其内に御飯が濟みました。

「さあ貴方からお取りなさい。」

叔母様は心持ち菓子鉢を豚男さんの方へ押しやりながら仰有いました。叔母様は先刻から豚男さんの變な樣子を、見ないやうな風でゐて、よく御存じなのでした。

食卓の向ふから母様の眼が豚男さんの方を見てゐます——どうぞ無作法なまねをしないやうにね……母様の眼はさう云つてゐるやうでした。豚男さんは思ひ切つてお菓子をとりました。

母様の眼はホッと安心したやうに見えました。豚男さんは些少もお菓子をいぢりんぼにしないで、一番手近のをとりましたから。

「フ、しまつた！」

豚男さんがさう思つた時には、もう仕方がありませんでした。

まあ何と云ふ變手古な切りかたのお菓子でせう。豚男さんが大きな一切だと喜んでゐたのは、小さなのが二切一緒にくつついてゐるのでした。ですから豚男さんが取らうとすると、お菓子は眞中から二つに切れてしまひました。

「仕方がない！」

悲しげに小さな一切れをとつた豚男さんがチラリと母様の方に眼をやると、母様は如何にもお綺れしさうに苑爾してお見せになりました。

「僕は間違つて少さいのをとつたのに！」

豚男さんは心の中で、そつと母親におわびを云ひました。

ですが豚男さんはもう些少とも口惜しくもありません、悲しくもありません。間違つて小さな切をとつたのでさへ、母様はあんなにも喜んでらつしやる——さう思ふと豚男さんは嬉れしくつて、嬉れしくつて、一番大きな切のお菓子を頂いた時より、もつと〳〵幸福だと思はれました。